岐阜県中津川市加子母地区における水辺と子どもの関わりに関する研究

指導教員　藤岡 伸子 教授　　境 将司

1. 研究の背景と目的　岐阜県中津川市加子母地区は、山と川に囲まれた自然豊かな中山間地域である。ここでは林業が盛んで、住民が日常的に山と関わりながら生活している。一方で山からの恵みである加子母川と住民の関係は、川の環境変化や川への意識変化によって、希薄になっており、現在の加子母の子どもたちは川遊びや川の危険を知らないまま大人になると予想される。本研究は、良好な自然環境が身近に存在する加子母において、水辺と子どもの関係を再考するための１つの試みである。小学校での水辺における授業やワークショップが子どもと保護者に与える効果を検討し、水辺と子どもの関係を再構築するきっかけを生むことを目的とする。

2. 研究の対象と流れ　本研究では、水辺と子どもが関わる代表的な例として、「川遊び」を対象とする。

研究の流れとして、まず地域住民を対象に加子母川での川遊びについて聞き取り調査を行った。次に、中津川市立加子母小学校と連携し、川に関する授業の調査と、児童を対象にした川遊びのワークショップを行った。最後に、川での授業が子どもと保護者に与える意識変化と、現状の加子母川での川遊びに対する保護者の意識を調べるため、保護者を対象にアンケート調査を実施し、その重要性を検討した。

3. 加子母川の歴史と現状　文献調査[1]及び住民への聞き取り調査をもとに、加子母の川遊びの変遷に影響を与えた出来事と、その具体的な変遷の内容の対応関係を、年表に示す（表 1）。

3.1）加子母川の歴史　加子母川は、飛騨川の支流である白川の、最上流部分の通称である。1971 年 9 月 6 日、加子母は集中豪雨によって鉄砲水に見舞われた。これにより、川はより危険なものとして認識されるようになった。この災害を機に、上流の小郷地区[2]の防災ダムが着工され、同時に川全体の護岸整備も徐々に進められていった（1971 ～ 1982）。

護岸整備以前、子どもたちは頻繁に川遊びをしていた。幼少期に川遊びを楽しんだ加子母の住民に聞き取りを行い、その具体的な内容を整理した（表 2）。

3.2) 加子母川の現状　3.1) で述べた護岸整備以降、川遊びができる場所が激減した。1988 年に B&G 財団海洋センター[3]が完成し、1991 年に加子母村に無償譲渡された。自然が身近にあるにも関わらず、子どもたちがこのプールを利用するようになったことで、川と子どもの関係がさらに希薄になっていった。

表 1 加子母の川遊びの年表

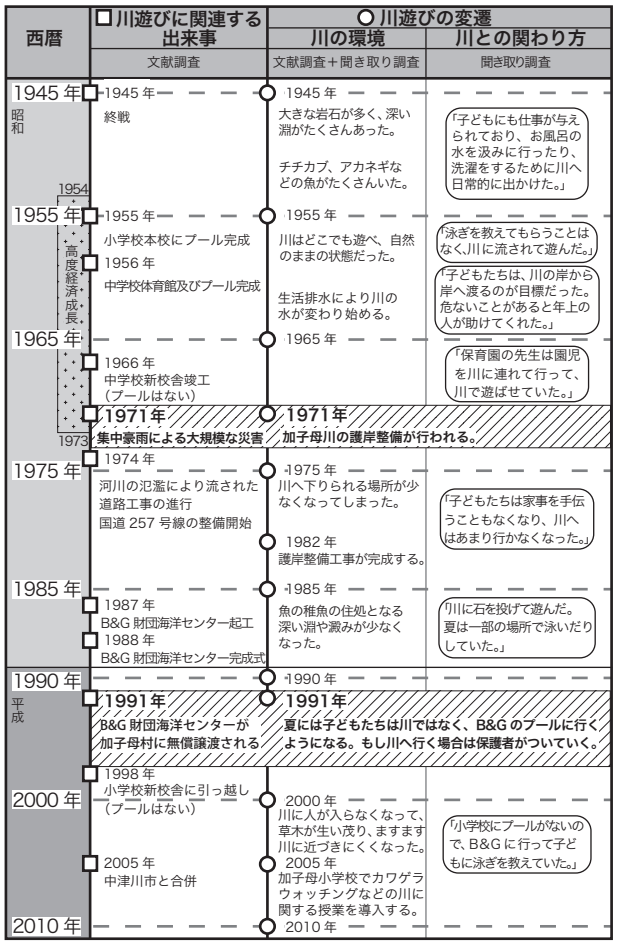


表 2 聞き取りにより得られた川遊びの内容

種類	川遊びの内容
川泳ぎ	加子母川は水量が少ないため、川に身を任せて流されて泳ぐ。
競争	岸から川へ木の葉や枝を投げてそれを取ってくる速さを競争する。
飛び込み	夏に橋の上から川へ飛び込む。
川干し	石を川に並べて水の流れを変えることで川を干し、取り残された魚を捕る。
ヤス突き	「ヤス」と呼ばれるモリや、「タクリ」と呼ばれる、先端がヤスよりも１本多いモリを使って加子母川の鮎を捕る。
魚釣り	小魚を網で捕る。水中メガネを着用し、短い竿で釣りをする。
水切り	水面に向かって石を投げたり、川にある石の上を跳んで遊ぶ。

（聞き取り人数：11 名、年代：1934～1993 年生まれ、聞き取り期間：2016 年 5 月 20 日～10 月 17 日）

4. 加子母小学校との連携　加子母小学校は学年ごとに特色ある年間指導計画を設けている。4 年生では 1 年を通して加子母川について学び、主体的に川と関われるよう計画されている。小学校と連携し、この教育計画の一環として、川に関する授業の調査とその有用性についての分析を行い、また、総合学習の授業として、地域と協力した川遊びのワークショップを実施した（図 1）。

4.1）カワゲラウォッチング　岐阜県は、環境省が進める「カワゲラウォッチング」[4]という全国規模の河川の水質調査を、地域の子どもと共に実施している。小学校では、前述した 4 年生の授業の 1 つとして導入されており、子どもたちが川と触れ合える

A Study of the Children's Waterfront Activities in Kashimo, Gifu Prefecture

Masashi SAKAI

貴重な機会となっている。実際に今年度の授業に参加してその実態を調査し、授業の様子を記録した。

4.2）川に関する授業の有用性　4.1) の授業について、全校生徒の保護者 65 人を対象としてアンケート調査を行った。川に関する授業を受けた経験のある 4 年生以上の子どもの保護者 39 人に、授業後の様子を問うたところ、川に興味を持っている子は、授業前と比べて 10 ポイント増加した（図 2）。また、9 割以上の保護者がこの授業を良いと思っており、理由として、「自然と触れ合える」に加え、「川の危険や怖さも学べる」という意見があった（図 3）。

4.3）ワークショップの実施　加子母小学校と協議を重ね、現在の加子母川で実施可能な川遊びの内容を決定し、4 年生を対象として川で安全に遊ぶためのワークショップを実施した。網で魚を捕まえ、捕まえた魚を観察・記録することで、身近な場所でも自然との触れ合いを学ぶことが可能な内容とした。

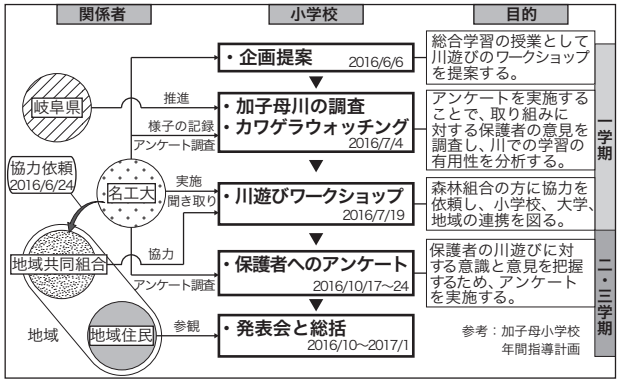


図 1 加子母小学校との関係図及び目的

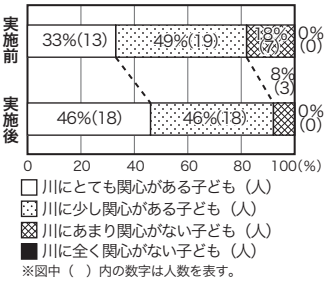
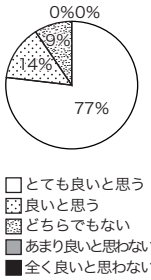


図 2 授業実施前後の比較



回答理由	人
自然と触れ合える	59
川の大切さを学べる	50
危険も学べる	5
実態をよく知らない	2
他に遊ぶ機会がない	1
地元の人と交流できる	1
外で遊ぶことは必要	1
川で遊ばせるのは怖い	1

図 3 川に関する授業への意見

5. 川遊びに対する子どもと保護者の意識調査

子どもとその保護者の川遊びに対する意識を把握するため、保育園・小学校・中学校の保護者を対象にアンケート調査を行った（表 3）。

5.1）保護者から見た子どもの意識　子どもが川に行く頻度と関心を、保護者の出身地別に比較した。結果は、加子母外出身者の子どもの方が、川に行く頻度が 11 ポイント高かった（図 4）。また、川に関心がある子はどちらも多かったが、全く関心がないのは、加子母出身者の子に多く見られた（図 5）。

5.2）今後の川遊びに対する意見　子どもを川で遊ばせたいかどうかを 5 段階評価で尋ねたところ、73% の保護者が、遊ばせたいと回答した。

川遊びに対する意見では、「自然」や「川の大切さ」を重要視する声が多く、川遊びに必要な条件としては、子どもを遊ばせたいかどうかに関わらず、「川で遊ぶ場所が安全に整備されていること」「大人が一緒に行くこと」を必要と考える保護者が多かった。また、「自然と触れ合えること」も川で遊ぶ重要な目的であることが明らかとなった。（図 6）

表 3 アンケートの概要

調査期間	2016 年 10 月 17 日～24 日	
配布方法	加子母保育園及び小、中学校の生徒の保護者に対し、各教育機関を通して配布する。	
対象者数	加子母保育園 32/48 名 (回収率 66.66%) 加子母小学校 54/74 名 (回収率72.97%) 加子母中学校 49/66 名 (回収率 74.24%)　　計 135/188 名 (回収率71.80%)	
調査内容	0. 基本情報	【性別】【年齢】【居住地】【出生地】【職業】【家族構成】【学年】
	1. 保護者の川遊び経験	【幼少期の川遊び経験の有無】【川遊びの内容】
	2. 子どもの川に対する意識	【川へ行く頻度】【川への関心】
	3. 加子母小学校の取り組み	【川の授業経験の有無】【授業後の子どもの意識変化】【取り組みに対する意見】
	4. 今後の川遊びに対する意見	【川遊びに対する意欲】【現状の川遊びに対する意見】【遊ばせる場合の条件】

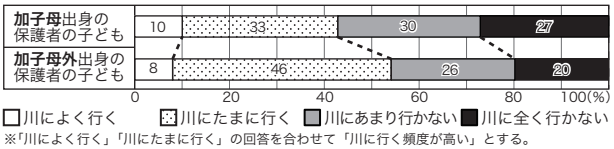


図 4 子どもが川遊びに行く頻度

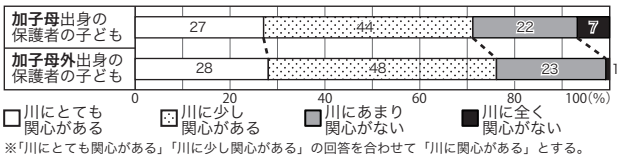


図 5 子どもの川への関心

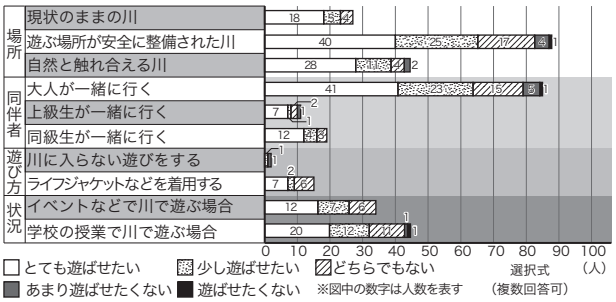


図 6 川遊びに必要な条件

6. 結論

川と子どもの関係が希薄になった原因の 1 つは護岸整備であった。それに加え、護岸整備以前の川が本来あるべき自然だと保護者たちが考え、現況の川を、自然と触れ合えないただ危険な遊び場と捉えていることも一因であることが分かった。

今後の川遊びにおいて、まずは保護者が理想と考える環境づくりが必要である。学校や地域が川で遊べる場所を協議して選定し、自然本来の姿に近い親水空間として再整備することで、安全な遊び場を確保することができる。地域が川と子どもの関係に子どもを見守る第三者として介入することで、川遊びを通した地域教育も可能となる。地域全体がこの共有意識を持つことで、将来的には新たな川遊びの場を生み出すことができる、という展望が得られた。

【謝辞】 本研究を進めるにあたり、ワークショップの実施や、アンケート及び聞き取り調査にご協力頂いた、加子母小学校をはじめ加子母の皆様へ感謝の意を表します。

【註】 1：加子母村誌編集委員会『加子母村誌』(加子母村，1972)、『かしも通信』(2007. 8)、『広報かしも No. 155』(1995)　2：加子母全 10 区の内、最北端に位置する。　3：モーターボート競争法 20 周年を記念して設立された。レースの収益金により、全国 480 市町村に海洋センターを建設し、地元自治体に無償で譲渡している。　4：「小中学生及び高校生、水質保全団体等の参加を得て、身近な河川に棲む生物を調べることにより、河川の水質を知り、また、調査の体験を通じて水質の保全及び、浄化の重要性を認識する」ための活動。（岐阜県庁環境生活部自然環境保全課）